

これら三才所以外の踊も含めて、各地の踊はいずれも沖縄や沖縄の人びとのかかわりを由来として伝えているものの、実際の沖縄の踊との類似はほとんど感じられない。また、奇矯で滑稽な動作の演技、仮面や衣装や化粧による異相・異形の扮装、踊り手が意味を解さない詞章が混じるかけ声や歌詞といった、沖縄の人びとが自分たちはさまざまな面で異質であることを強調するかのような演出が施されていることも共通する。

それに加えて、こうした踊が熊本県と宮崎県中部以北、奄美大島以南の奄美群島では見られず、旧薩摩藩領に分布が限られることを併せて考えるところからの踊の伝来が、薩摩藩が慶長一四（一六〇九）年の琉球侵攻によつて琉球支配を確立し、琉球から鹿児島に進貢船や使節が頻繁にやって来るようになつたという、この地域が経てきた歴史と無関係ではないことを予



ヨンシー踊（2003年10月）

想させる。更に、奄美大島以南の各地の芸能に、丸に十の字の島津氏の紋をつけたそれほど奇矯でも滑稽でない武士や役人がしばしば登場することも視野に收めると、この地域の薩摩藩と琉球の支配・被支配の歴史のなかで、双方の人びとが相手側の人びとに対して抱いた必ずしも対等とはいえない認識が、それぞれの芸能に刻印されているようにも思えてくるが、うがち過ぎであろうか。



「バコバンバの貴婦人」を担ぐ高校生たち（2015年）

ジャガーを象った石彫や、金製首飾りの墓などが毎年のように出土し、今では考古学関係者ばかりではなく、一般にもその名は知られるようになった。わたしたちは遺跡見学会や出土遺物の展覧会などをとおして、村人に調査・研究内容を説明し、また作業員の選出や給与についても村委会に託すなど、村との共同作業を心がけてきた。このことが功を奏してか、五年ほど前に遺跡保護団体が自主的に結成されている。



「開祖二先生」と書かれた襷をかける幼稚園児（2015年）

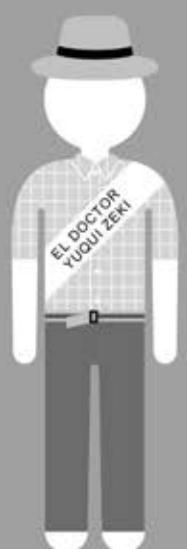
### 仮装行列に登場する「わたし」

そんな村人の意識は、村祭りにもあらわれ始めた。祭りを仕切る委員会の発案で、二年前から仮装行列が祭りの出し物に加わったのである。幼稚園児や小中学生が、さまざまな人物に仮装する。村の守護聖人である聖女サンタ・ロサやイエス・キリストが登場するのは普通だとしても、「文化遺産の村バコバンバ」と書かれたプラカードをもつ母親の後から、遺跡で発見された「バコバンバの貴婦人」姿をした女児が登場したのには驚いた。それだけではない。バナマ帽をかぶり、手に杖をもつ、かわいらしい男児の肩にかけられた襷には「YUQUI ZEKI」（ユキセキ）の文字が見えるではないか。綴りの間違いはともかく、調査中のわたしの姿にはちがいない。しかも調査に加わる日本の女性考古学者の仮装も続く。小中学生の行列はもつと豪華であった。採集狩猟民から始まり、「バコバンバの貴婦人」、インカ王、植民地時代を象徴するイエス・キリストや聖人、村にはじめて布教に来た宣教師、そして再び「わたし」が登場したのである。

わたしたちの存在や調査の成果は、人びとの歴史意識のなかに位置づけられ、アイデンティティのよりどころとなりつつあるようだ。文化遺産の保護や活用にばかり気をとらえていたせいか、地元の人びとが自らの手で、歴史や文化遺産への関心を高めていたことに自分で気づいていなかつた。

# 日本人考古学者に 仮装

関 雄二 民博人類文明誌研究部



### わたしたちの発掘調査

わたしたちがここ十年以上も発掘をおこなってきたペルー北部高地バコバンバ遺跡の麓に、調査期間中滞在する同名の村がある。村祭りではチュンチヨスこそ登場しないが、外来者が重要な役割を果たす。遺跡は紀元前一二〇〇年ごろから紀元前五〇〇年ごろにあたる大神殿で、東京ドームひとつ分くらいの大きさを誇る。二〇〇九年に、金製の耳飾りを副葬した女性指導者の墓を発見し、「バコバンバの貴婦人の墓」と名付けた。その後も、